



Title	献辞
Author(s)	林, 善茂
Citation	北海道大學 經濟學研究, 27(1)
Issue Date	1977-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/31365">http://hdl.handle.net/2115/31365</a>
Type	bulletin (article)
File Information	27(1)_Pi-ii.pdf



[Instructions for use](#)

## 献 辞

北海道大学教授経済学博士鎌田正三先生は、昭和52年4月1日をもって定年退官を迎えられた。先生は大正2年9月23日小樽に生まれ、小樽高商から東北帝国大学法学部経済学科に進まれ、昭和15年3月同学科卒業後、進路を学究の道にえられ、三菱経済研究所々員、東亜研究所々員、東北帝国大学法学部助手を経て、昭和23年9月創設後間もない本学法文学部助教授として着任された。25年4月に法文学部は文学部と法経学部に分離し、28年8月に法経学部はさらに法学部と経済学部に分離して、経済学部の独立をみたが、創立当時の物心ともに困難の多い時期に、先生は孜々として研究・教育に努められ、昭和32年1月には経済学部教授に昇任され、同じく4月には経済学博士の学位を得られた。そして、36年11月から1年間、文部省在外研究員としてアメリカ合衆国に出張を命ぜられ、ハーバード大学の Hidy 教授のもとでアメリカの経営史について更に研鑽を加えられた。

北大赴任以来、先生は一貫して経営学の研究・教育に盡力してこられたが、特に昭和41年における経営学科の創設、および同51年における大学院経営学専攻の開設にあたっては、経営学関係の中心教授として非常な努力を重ねられ、経営学科のいわば産みの親ともいふべき重要な役割を果たされた。そのほか、工学部において工業経済学を講ぜられ、また法学部、教育学部、農学部および小樽商大の非常勤講師を兼任されて経営学を講ぜられるなど、学部外の教育にも種々力をつくされたが、さらに昭和38年4月から42年7月まで北海道大学評議員として大学行政の枢機に参画され、また屢々経済学部長代理として学部の運営に貢献された。

先生の主著で学位論文ともなった「アメリカの独占企業」(時潮社、昭和31年)は、この方面の研究のわが国における先駆的業績であったばかりでなく、古典的労作として今なお多くの研究者によって推重されているところのものである。この著書によっても分るように、地味ではあるが緻密にして堅実な

実証的学風は先生の特質であって、その影響は門下の人々にも深く滲透し、さきに共同研究の結果をまとめた「アメリカ資本主義」(青木書店、昭和47年)にもその傾向は顕著にあらわれている。先生はその後も研究を発展させられ、アメリカの代表的企業の企業財務について個別に緻密詳細な分析を続けられ、「アメリカ企業金融史」の完成に邁進しておられる。かように、一つの問題を追求されて倦むところがなく、一步一步着実に掘り下げて深化発展させる先生の研究態度には、いかにも北海道人らしい粘り強さが感じられ、その意味において先生は典型的な道産子の一人であるといえることができる。

温厚・明朗で包容力に富む先生の人柄には一種大人の風格があるが、同時に古典音楽を愛好する繊細な感覚と豊かな人間性の持主である。しかも、内に非常に強靱な意志力と忍耐力を秘めておられることは、その研究態度にあらわれているだけではなく、長年嗜んできた酒、煙草を断たれて禁酒、禁煙に徹しておられることなどにもみられ、われわれのひそかに感服にたえないところである。先生は数年前に一時健康をそこねられたが、きびしい節制を続けられた結果、いまでは以前にまさる健康体となられ、精神的にも肉体的にも非常に若々しい。そして柔和な笑顔とユーモラスな話術で、周囲の者にほのぼのとした暖かみを与えて下さる。その先生が定年で経済学部を去られることは、われわれにとってまことに名残り惜しく、淋しいことである。また経済学部の今日が先生の御苦勞に負うところがいかに多かったかを、今更ながら痛感させられるのである。先生は定年後は東京に移られ、これからも研究・教育活動が続けられるとうかがっているが、どうかいつまでもお元気で学界のために御活躍なされ、またわれわれ後輩のためにも未長く御指導くださるよう御願いして、先生の退官を記念するこの論文集の序とする次第である。

昭和52年 3月

北海道大学経済学部長 林 善 茂